

「標準外科学アトラス」

東京医科歯科大学教授 三 島 好 雄
 元杏林大学教授 相 馬 智 編
 新潟大学教授 武 藤 輝 一

東北大学教授

佐 藤 寿 雄

最近の医療技術、特に画像診断法の飛躍的進歩により、各種病変は明瞭かつ精細に把握できるようになった。しかし、これらの医療情報を有効に利用するには、まず各疾患における画像上の基本的なパターンを頭の中に入れておく必要がある。本書はこのような観点より編集されたものである。脳外科、呼吸器外科、心臓外科、消化器外科、血管外科、小児外科などの各分野の代表的疾患を集め、標準的、典型的な画像を呈示している。

本書を執筆されたのは各分野の第一線で、そして学会で活躍中の方々であり、それぞれの分野の第一人者である。このような布陣で書き上げられた本書の特徴としては次のようなことが挙げられよう。

第1には、各臓器の代表的疾患の標準的、典型的画像が掲載されている。画像の並べ方も、スクリーニング検査のような簡単に行えるものか

ら精密検査へと、実際の臨床上の手順を追う形で並べられており、確定診断がつけられるまでの道筋が示されている。また、X線、CT、US、シンチ、内視鏡、細胞診、組織の像などのほかに心電図や心音図もあり、全体で916個もの美しい画像が掲載されている。各画像には、所見の部位に矢印が付され、また、一部の画像にはシェーマも書き加えられ、一目で病変が把握できるようになっており、更に、各画像ごとに簡潔明瞭な、そして極めて適切な説明がなされている。白黒の画像が主体ではあるが、所々に術中写真や切除標本写真、内視鏡写真などのカラー写真も挿入され、アクセントを強めている。

第2には、ベッドサイドにも持ち込めるような大きさ、厚さの冊子であり、small group teachingなどの場でも手軽に利用できることであろう。日常診療の場で知識を確認する

にはまことに適切な参考書となるはずである。

第3には、医師国家試験の臨床実地問題にも役立つような形式で書かれていることである。医学教育の段階では国家試験を意識したくはないが、避けては通れないものである。その医師国家試験も年1回となり、厳しさも増している現在、画像を見慣れ、所見を捉える訓練を常日頃心掛けておく必要がある。かかる観点からも、本書は気くばりの行き届いたテキストである。良い企画と適切な著者に恵まれたからこそであろう。

このような素晴らしいテキストを安易に入手できる最近の学生諸君は幸せであると言いたい。

1976年6月、昭和29年卒の諸兄が「標準外科学」なるテキストを上梓された。今なお、一世を風靡している名著である。羨望の思いに駆られたことを忘れることができない。今また、その姉妹版であるという。前回のテキストを補って余りあるものがある。思えば小憎らしいまでの俊才がこの学年に集中したものである。いずれも日頃敬愛する方々である。今回もまた心からの敬意を捧げたい。

B 5判 422頁 写真831 原色図116

1986 7,800 400

医学書院 刊